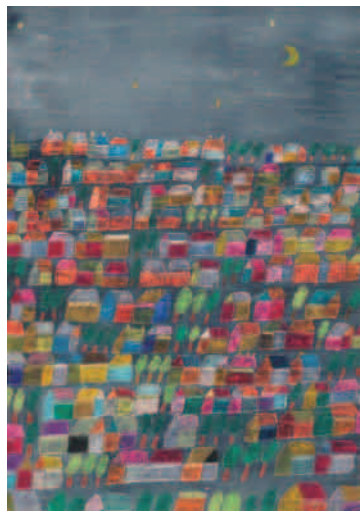




牧場(オーストリア)

緑豊かなアルプスの麓の緑豊かな牧草地で牛などの家畜が放牧されて育ちます。一休みしている牛飼いの男性はアルペンハットを被り、独特なジャケットとズボンという山岳地帯の仕事着であった民族衣装を着ています。



わたしの村
(ベルギー)

美しい色彩で描かれたこの作品は20世紀前半に活躍したスイスの画家パウル・クレーの作品を彷彿させるところがあります。こうした作品の生まれる背景にあるヨーロッパにおける美術文化というものを感じさせます。



小さな農場(デンマーク)

デンマークは農業や畜産の盛んな国としても知られていますが、この絵には飼料か作物を荷台に乗せた馬車が描かれていて、機械化された近代的農法が普及する以前ののどかな農場風景が表現されています。



ドラムをたたく人(スリランカ共和国)

スリランカの伝統音楽では横長の両面太鼓のリズムが欠かせません。この絵の両面太鼓をたたく人物のように輪郭線を強調して色彩のコントラストで表現する仕方というのはバティックの技法につながるものがあります。



お祭り(台湾)

台湾の獅子舞は日本のものと比べて色鮮やかな点が特徴です。この絵に描かれているカラフルな獅子舞は現在でも見ることができます。子どもの絵は時代の変化だけではなく時代を超えて変わらないものの姿も伝えています。



木こり達
(マレーシア)

マレーシアの豊かな熱帯雨林は木材資源の宝庫でもあります。この絵には機械による大量伐採ではない、手作業で木を切る先住民の木こりの姿が描かれています。当時は、現在のような深刻な環境破壊はまだ進んでいませんでした。

世界のお友だちとの 交換図画作品解説文

家の光協会は、JAグループの一員として、協同組合精神にもとづき、出版文化活動を通じて農山漁村文化の向上に寄与することを目的として設立された団体です。

この「世界のお友だちとの交換図画」は、『家の光』創刊30周年記念事業の一つとして1954年から1980年まで、外国と日本の協同組合員家庭の児童同士が図画を交換することによって、国際親善の実をあげることを目的に開催しました。

世界じゅうから集まった作品は、全国各地で展示会を開いたところ、各方面から高い評価を受けました。そこで、海外児童の作品は日本の特選作品を出した学校へ、また国内の作品は海外へ、それぞれの協同組合を通じて贈ることにしたのです。また、その前には、作品を1冊に収め『なかよし画集』としてまとめました。この企画は1993年からは現在の「世界こども図画コンテスト」として続いています。

今回は、当時の作品の一部につきまして、海外の子どもの美術に詳しい大妻女子大学教授の金田卓也氏に解説いただきました。

この作品を目にした多くのこどもたちが、身近な自然や農業に目を向けるとともに、世界に視野を広げ、協力と友情の心を育むきっかけとなれば幸いです。



ようこそ世界のお友達(ソ連)

旧ソビエト連邦の社会主義体制は1991年に崩壊してしまいましたが、この絵のタイトル、そして描かれた船に掲げられたさまざまな国旗には、ソ連の目指した社会主義による理想の国家が象徴されているように見えます。



散歩(南アフリカ)

この絵に描かれた散歩をする人たちはみな青い目をした白人です。白人とそうではない人々を差別するアパルトヘイトと呼ばれる南アフリカの人種隔離政策が撤廃されるのは1994年まで待たなければなりませんでした。



一般社団法人 家の光協会



目隠し遊び(フランス)

今ではモニター上のゲームに興じる子どもたちの多いフランスでも目隠し遊びのような遊びが盛んだった時代がありました。遊びとともに子どもたちの着ている服のデザインを見ても時代の変化というものがわかります。



祈願の行列(西ドイツ)

ドイツは第二次世界大戦後、西ドイツと社会主義国家の東ドイツという二つの国家に分断されました。この絵は西ドイツから送られてきたものですが、ベルリンの壁が崩壊し、ドイツが統一されるのは1990年のことです。



ある村(アフガニスタン)

アフガニスタンは1970年代のソ連軍の侵攻、そしてタリバンによる支配と激動の時代が続きます。そうした混乱の中、絵に描かれているような黒いテントで移動しながら生活する遊牧民の数は現在激減しています。



とり入れ(韓国)

黄金色の稲穂の中での秋の収穫の喜びはいつの時代も変わりませんが、かかしと稲刈りを手伝う子どもたちの姿は、一昔前の日本の農村風景に共通するものがあり、そこに時代の変化というものを見ることができます。



ホームパーティー(チェコスロバキア)

チェコスロバキアは1993年に現在のチェコとスロバキアとして分離するまでは社会主義の国でした。この作品には、東欧の旧社会主義国からの応募作品に共通する絵画的な質の高さというものが感じられます。



町のにぎわい(シリア)

絵の中のさまざまな品物の並ぶバザールを行きかう人々の姿を見てみると、男性も女性も多くの人たちが民族衣装を着ています。近代化も進み平和だったシリアですが、今、内戦の最中で混乱の日々が続いています。



まつり(ソ連)

描かれているヴォルガ川の流れる都市はスターリングラードと呼ばれていましたが、1961年にスターリン批判から川の名にちなんだヴォルゴグラードという名前に変えられます。都市名の変化がひとつの歴史を示しています。



陽のあたっている家々(アメリカ)

オランダ生まれで1950-60年代に米国で活躍したアクション・ペインティングの代表的画家であるウィレム・デ・クーニングの絵を思わせる画風になっています。当時の指導者の現代美術への関心の高さがうかがえます。



故障した車(ナイジェリア)

内戦が続いたナイジェリアに民主的な政権が誕生するのは1999年になってからです。民主化する以前の混乱の時代に描かれた作品ですが、近代化へ向けて動き出した当時の生活というものが伝わってきます。



音楽家(インド)

この絵には伝統的な民族楽器であるタブラを叩く音楽家の姿が描かれています。最近のインドの経済的發展には目を見張るものがありますが、そうした伝統音楽は現在のインドの生活の中でも生き続いています。



労働(ウルグアイ)

南米のウルグアイは1955年以降、経済的に低迷し、政治的な混乱が続きます。この絵に描かれた溶接をする労働者たちの姿に畜産中心の産業から工業化を目指していこうという当時の社会的気運を感じることができます。



童話 「キツネ」 (カザフ共和国)

カザフ共和国は、1991年にカザフスタン共和国として独立するまで、旧ソビエト連邦の構成共和国のひとつでした。カザフの人々の間には、イヌワシを使ってキツネなどの獲物を捕らえる伝統的狩猟法が伝えられています。